

教育・保育実習指導におけるルーブリックの活用

平 澤 一 郎

The use of RUBRICS in early childhood education practical instruction

Ichiro Hirasawa

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

教育・保育実習指導におけるルーブリックの活用

The use of RUBRICS in early childhood education practical instruction

平澤 一郎

Ichiro Hirasawa

はじめに

平成 29 年告示の保育所保育指針第 5 章 1 職員の資質向上に関する基本的事項 (1) 保育所職員に求められる専門性の中で「各職員は、自己評価に基づく課題等を踏まえ・・・(中略)・・・必要な知識及び技術の習得、維持及び向上に努めなければならない」と記されている。このことは、これまで以上に保育士には自己評価に基づき課題を発見し、専門性を高めることが求められるようになったことを意味している。これは保育士に限らず、幼稚園教諭・保育教諭にも同様に求められているのではない。

こうした背景を踏まえると、保育現場に出る前に学生時代より自己評価を行う習慣付けが求められてくることになる。

筆者は多くの保育士・幼稚園教諭志望の学生と関わってきたが、学生の掲げる実習目標については「積極的に頑張る」など、意欲的な面での目標が多く、実習後も「積極的に頑張った」などと自己評価をしていることから、学生の実習振り返りは指導の中でも大きな課題であることを認識していた。

本稿の中では、この課題を解決すべく、ルーブリックという教育手法を実習事前指導の中に取り入れ、実習巡回時の振り返り、実習後の振り返りに活用した内容について検討していく。

ルーブリックを実習事前指導で活用した内容として、平澤(2016)は、実習事前指導の前にルーブリックを作成、キーワードを KJ 法によりグループ化し、保育実習のミニマムスタンダードとの比較を行った。しかし、この中ではキーワードのグループ化が曖昧であり、客観性に乏しいことがわかる。また、実習指導と地域での活動の両面から捉え、焦点が定まっていないこともあった。

そのため本稿の中では①教育実習（幼稚園教諭取得のための幼稚園での実習）、保育実習（その中でも保育所での実習）の事前指導のみに焦点を絞ってのルーブリックを使用した一連の流れについての提案を示すこと②作成したルーブリックを基に学生が実習という課題に対し、どのような目標をかかげる傾向にあるのかを明らかにすることの 2 点について述べていく。この 2 点の内容から実習事前指導でのルーブリックの活用について検討していきたい。

1. ルーブリックの概要

(1) ルーブリックの定義

ステーブンス&レビ (2014) によるとルーブリックとは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」「ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができる」²⁾と述べている。

また、石井(2010)はルーブリックとは「成功の度合を示す数値的な尺度 (scale) と、それぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述後 (descript) から成る評価指標のこと」³⁾と述べており、「パフォーマンス課題のように、子どもの自由な表現を引き出す評価課題では、子どもの反応に多様性と幅が生じるため、質的な判断が求められる」⁴⁾として、正誤法などのテスト問題との違いとしてルーブリックの有効性を述べている。

つまりルーブリックの従来の評価との違いが、数値的な評価方法ではなく、具体的な行動が書かれていることにある。そのため、学生としても具体的にどの状態であればより1段上の評価がもらえるかということが、詳しくわかり、具体的に行動の見通しが立てやすいことにある。特に、一般的なテストと違い、正解不正解が必ずしも決まっていない実習の評価ではルーブリックのような質的な採点指針が必要となる。

(2) ルーブリックの各種モデル

ステーブンス&レビ (2014) は「学生と作成するルーブリック」⁵⁾として5つのモデルを提示している。

① 提示モデル②フィードバックモデル③回収箱モデル④ポスト・イットモデル⑤4×4モデル

本稿ではこの中でも⑤4×4モデルを採用してルーブリックを作成する。その理由としてはステーブンス&レビ (2014) が述べているように、このモデルは「学生が関与する度合いは非常に大きい」が、グループ単位で検討したり原案の見直しを行う機会が多いため、初年次学生を対象にしてもうまくいく」⁶⁾ことがある。

実際に③回収箱モデル、④ポスト・イットモデルを試してみたものの、作業量が非常に多く、学生が途中で飽きてしまったこともある。一方の①提示モデルや②フィードバックモデルでは教員の関与が多きすぎて、学生自身が自分で自己評価表を作成したと実感を持てなかった。

以上のことから⑤4×4モデルを採用したが、手順は多少簡略化した(本来では4人組のグループで行うところを、基本的に個人での作成にした)。これは学生個人間のレベルの差や実習先が異なること、それ以前の実習の評価の差などを考慮して、個人でルーブリックを作成することとした。具体的な手順としては、後ほど提示する。

(3) ルーブリック活用の必要性

中島・井上(2015)はルーブリックについて「作成に手間がかかるものの、学生数が多い場合は、採点にかかる時間を短縮することができ」⁷⁾と述べている。筆者は実際にルーブリックをレポートの採点に3年ほど使っているが、採点基準を統一化できたり、作業を効率化する上ではとても役に立っていると実感している。学生としても評価基準が明確であることで、レポートも具体的にどのように作成したらよいのかを見通しを持って作成することができていたようにも思う。

石井(2010)は「ルーブリックを理解することによって、子どもは見通しをもって学習に取り組み、自らの理解の深まりを自己評価しながら自律的にパフォーマンスを遂行していけると考えられ」⁸⁾と述べていることから、学生のルーブリック理解が実習への見通しに繋がっている。

また、平澤(2016)の中でも、学生が親子向けの演劇発表会を実施する際も自分で評価表(ルーブリック)を作成したことで、評価者である施設責任者に対しても「この視点で見て欲しい」ということを明確にすることができた。近年求められているアクティブラーニングの手法としてもルーブリックを活用する必要性は大きいと言える。

2. 教育・保育実習指導でのルーブリック活用の概要

(1) ルーブリック実施上の目的

本研究においては、実習指導の中でのルーブリックと活用することの目的として、学生がルーブリックの作成から自己評価までの一連の流れの中で、繰り返し自己評価を行うことを習慣化することとしている。保育士・幼稚園教諭の両方の免許を取得しようとする場合、最低でも2週間の実習を合計5回行くことになるが、これまでの筆者の経験の中では、学生がそのたびにしっかりと目標を掲げられているか、疑問に思うところもあった。

ステューブンス&レビ(2014)はルーブリックを使う理由として6点挙げているが、その中の1つに「批判的思考のトレーニング」⁹⁾について述べている。この中で「学生はルーブリックを通して課題のなかで繰り返しつまずく箇所や継続的に伸びている部分を自覚する」¹⁰⁾と述べている。

平成29年度公示の保育所保育指針の中に自己評価が記載されたように、実習だけではなく、現場で働くようになってからも自己評価が求められるようになったことから、日頃から自己評価を行うことが求められてくることが予想される。

しかし、現場に出たからと言ってすぐに自己評価ができる訳ではないだろう。やはり日々の中で少しずつ行っていくことで、自己評価ができるようになってくるのではないだろうか。以上のことからルーブリックを実習のたびに繰り返し行うことで、習慣化することができるのではないだろうか。

(2) ルーブリック実施の流れ

ステューブンス&レビ(2014)はルーブリックの作成については4段階あると述べている¹¹⁾。

第1段階：振り返り（学生に期待していること、なぜこの課題を作ったのかについて振り返る）

第2段階：リストの作成（課題完成時にできるようになってほしい学習目標に焦点を絞る）

第3段階：グループ化と見出し付け（1, 2 段階の結果をまとめ、各評価観点に対応するものをまとめる）

第4段階：表の作成（評価観点と評価基準をルーブリックの最終形式に当てはめる）

実際にこの4段階をそのまま実習事前指導で行ったところ、「学生が個々の質問に答えにくい」「1 コマ（50 分）の授業内に終わらず、細切れの作成になってしまう」「行程が長すぎて、学生の集中力が持たない」ことがあったため、第1段階の振り返りの際の質問項目を教育・保育実習用にアレンジするとともに、1 コマの授業内で終わるように3 段階目を簡素化した。

具体的な方法としては、実習 1 か月前くらいに実習事前指導の中で表 1 の用紙を用いてルーブリックの作成を行う。ルーブリック作成の手順としては以下の通りとなる。

- ①第1段階では教育・保育実習用にアレンジした 5 つの質問（オリジナルは 8 つの質問）に答える。
- ②1 つ目の質問から躓いてしまう学生もいたため、質問への回答ができるところからで可とする
- ③第2段階では実習後にできるようになりたい目標を挙げていく（最低 4 つ挙げてもらう）
- ④目標が書けたら、その目標を実現する具体的行動を記載していく
- ⑤第3段階では、表 2 の用紙を配布し、ルーブリックの最終形式である表に落とし込む

（3）ルーブリック実施上の留意点等

また、ルーブリック実施の留意点としては以下となる。

- ①授業 1 コマ（50 分）の時間内に実施する（個人で作成するが、話し合いながら作成しても可とする）
- ②授業内に書けなかった場合は宿題とするが、早めの提出にするため〆切は授業の 1～2 日後にする
そして、ルーブリック作成後の取扱いとしては以下となる。
- ①全員分を回収したらルーブリックはコピーして各学生に返却する
- ②ルーブリックは各教員が実習巡回の際に持っていき、実習途中での中間点を学生に自己評価してもらう
- ③実習後には事後指導の際に学生はルーブリックの点数を付けて提出する
- ④次の実習 1 か月前になったら再度ルーブリックを作成する

3. 学生の作成したルーブリックの分析方法

学生が実習に対してどのような自己評価を作成しているか、上記のように学生が作成したルーブリックを分析することでその傾向を探る。これにより、学生が実習という課題に対してどういった点を理解しており、また誤解しているかがわかり、教員としては今後の実習指導に活かすことができる。

表1 ループリック作成の流れ

記入日： 年 月 日 氏名：	記入日： 年 月 日 氏名：
平成 年度 ループリックの作成	
題目：実習（幼稚園、体育所、施設）にて、今後に繋がるような学びを得る	
＜第1段階：振り返り＞ 1. 過去の実習ではどうだったか？	＜第2段階＞ 1. 課題群に出来るようになりたい項目をリストアップして下さい。 ① ② ③ ④ ⑤
2. 次回の実習はこれまでに学んでもまだどのような科目とどのような関係があるか？	2. 上記①～⑤の項目ごとに、期待される最高水準の項目を記述する ① ② ③ ④ ⑤
3. この課題に対し、どのような知識・技術が求められるようになると思うか？	
4. この課題で期待する最高水準とはどのようなものか	
5. 不参加は別として、最低の評価となる場合はどのようなものか	＜課題3：表の作成＞ 以上を基に、次の実習に向けてのループリックを作成して下さい

表2 学生が最終的に作成するルーブリックの表

自己評価のためのルーブリック(記入日: 月 日)

今回の実習 (該当するものに○)	幼稚園・保育所・施設	氏名		
	A:目標以上(25点)	B:目標達成(15点)	C:あと少し(10点)	F:努力が必要(5点)

(1) 分析対象

- ・対象学生：A 専門学校3年課程3年生 39名（保育士・幼稚園教諭2種免許 取得希望者）
- ・分析対象：3年次に行われた実習3回分のために作成したルーブリック
（対象となる実習：教育実習2週間、保育実習Ⅰ（保育所）2週間、保育実習ⅡまたはⅢ2週間）
- ・実施時期：平成28年5月～10月

分析対象としたものは表3に挙げられているような、学生の作成したルーブリックに記載されている語句全てである。実習3回分のルーブリックのうち、「目標以上」「目標達成」の記述については、いずれも実習生に求められる行動であると学生が考えたものであるため、実習3回全員分のこの2つの記載をまとめて「ポジティブ行動」とする。

一方、ルーブリックのうち「あと少し」「努力が必要」の記述については実習生がやってはいけない行動であると学生が考えたものであるため、実習3回全員分のこの2つの記載をまとめて「ネガティブ行動」とする。このポジティブ行動とネガティブ行動の2つに分けて分析を行う。

(2) 分析方法

樋口(2014)の考案した KHcorder を用いて計量テキスト分析を行った。まずは「ポジティブ行動」「ネガティブ行動」それぞれに多く用いられていた語を出すために、メニューから「ツール」→「抽出語」→「抽出語リスト」を選択し、抽出語リストの形式として「頻出150語」を選択した。

次に頻出度合の高い語句がどのような語句と関連しているかを調べるために、「ツール」→「抽出語」→「階層的クラスター分析」を行った。このようにして「データの中でそれぞれの語がいかに関係していたのか」（樋口2014）を検討していく。

表3 学生の作成したルーブリックの例

自己評価のためのルーブリック(記入日: 月 日)				
今回の実習 (該当するものに○)	幼稚園・保育所・施設		氏名	
	A:目標以上(25点)	B:目標達成(15点)	C:あと少し(10点)	D:努力が必要(0点)
子どもとの関わり	自ら子どもに声をかけ、輪に入る	子どもから声をかけられ一緒に遊ぶ	特定の子との関わりが多い	ほとんど関わっていない
礼儀・挨拶	謙虚で挨拶を怠らない	挨拶を怠らない	挨拶されたらする	挨拶をし忘れる
態度	自ら動き、積極的に質問する	仕事を積極的に手伝う	指導を受けてから動く、質問する	仕事を手伝わない、質問しない
クラス運営	クラスをまとめリズムを乱さない	ある程度まとめることができる	職員の援助を必要とする	途中で投げ出す
		ポジティブ行動		ネガティブ行動

4. 結果

ポジティブ行動についての出現回数多いもの上位10は表4の通りとなる。この10の語句についてクラスター分析により、出現パターンが似通っている語句も併せて示してある。

ポジティブ行動としては「子ども」「積極」「行う」「自分」「見る」がいずれも多く出ている。出現パターンが似通っているものとの関連を見ると、1番頻出している「子ども」には「関わる」が関連しており、ポジティブ行動として「子どもと関わる」という記述が多いことが読み取れる。また、2番目に多い「積極」は3番目に多い「行う」と出現パターンが似通っていることから「積極的に行う」記載も多いことが読み取れる。4番目に多い「自分」に関しても出現パターンの似通った語句から考えると「自分で行動すること」や「自分で考える」といった語句が予想される。5番目に多い「見る」も同様に考えると「全体を見る」ことを大事にしていることが読み取れる。

一方、ネガティブ行動に関しては「子ども」「自分」は共通するものの、2番目の「全く」は「質問」と関連していることから「全く質問しない」という記載が多いことが読み取れる。3番目に多い「言う」と4番目に多い「先生」が関連していることから「先生に言う」という状況が出てくる。

5. 考察

(1) ルーブリックの分析から見られる、学生の実習への向き合い方の傾向

①子どもと関わることを重視している

ポジティブ、ネガティブいずれも1番出現回数の多い語句は「子ども」であり、いずれも「関わる」と出現パターンが似通っていた。このことから、多くの学生は実習の中で子どもと関わるのが実習評価としては良いことであり、関わらないことは良くないことであると思っていることがわかる。座学とは異なり、実習では実際の子どものと関わるができるため、実習でこの点を考えていることはある意味当然ではある。

表4 学生作成のルーブリックから頻出後の集計

ポジティブ行動 (目標以上、目標達成)				ネガティブ行動 (あと少し、努力が必要)			
	抽出語	出現回数	出現パターン 似通ってるもの		抽出語	出現回数	出現パターン 似通ってるもの
1	子ども	174	関わる	1	子ども	77	関わる
2	積極	70	行う	2	全く	41	質問
3	行う	54	積極	3	言う	33	先生
4	自分	53	行動 考えて	4	先生	30	言う
5	見る	47	全体	5	自分	29	考える
6	関わる	46	子ども	6	関わる	27	子ども
7	保育	42	学ぶ	7	行う	26	手遊び
8	援助	38	適切	8	読む	25	絵本
9	書く	37	日誌 丁寧	9	誤字	21	脱字 多い
10	声	37	質問	10	多い	21	誤字 脱字

②実習への姿勢を重視しているが、具体的な行動に繋がっていない

次いで2番目の出現回数に注目すると「積極的に行う」ことを良いこととし、「全く質問」しないことを良くないことと考えている傾向が読み取れる。しかし、ただ単に積極的に行うことや質問するという行動のみが重視され、その背景にあることにまで考えが及んでいないことも考えられる。

③技術的な内容の記述が少ない

出現回数の多い語の上位はいずれも保育の専門技術というよりも実習生としての姿勢や心構えな

どの点が多かった。実際に技術的な語句としてはポジティブ行動の 8 番目に「援助」9 番目に「書く」—「日誌」、ネガティブ行動の 8 番目に「読む」—「絵本」9 番目に「誤字」（恐らく実習日誌の記載であることが読み取れる）などがあるだけである。

以上のことから、学生たちは技術などができるというよりも、積極的な姿勢の面で自分を評価（または人から評価される）と思っているのではないだろうか。

（２）教育・保育実習指導におけるルーブリック活用

① 学生にとって

実習のたびに前回の実習を振り返り、授業との関連を再考する機会を作ることによって実習の目標設定を効率よく行うことができる。実習中でも自己評価を行うことで、見失いがちになる目標を再考するきっかけともなり、より具体的に自分の達成度を測ることができる。このサイクルができることで、実習を学びのサイクルとなり、働いた際の自己評価・自己研鑽の足掛かりとなるのではないだろうか。

② 教員にとって

学生自身が実習に対して目標を立てることから、実習にどのような思いでいるかの一例として参考になる。これは教員としては実習へ送り出す前に、学生の実習への取り組み方の現状を把握することにも活用でき、実習指導について誤解をもっている学生に対しては、再指導を行うための指針としても利用できる。つまり、指導を行う上での一つの評価としても活用できると考えられる。

また、実習巡回指導の際に用いることで、実習巡回に行く教員が新人など経験不足の際に指導を行うツールとして用いることで、指導上の質を保つことにも繋がる。しかし、本研究での分析は 1 専門学校の 1 学年での事例でしかないため、一般化には限界があるため、活用方法などについては更なる調査等が必要になってくるのではないだろうか。

（３）現場との連携の必要性

今回の調査はいずれも 3 年生であり、すでに 3 年生になるまでに 3 回実習を行っているため、1、2 年次の実習の影響を受けていることも考えられる。過去の実習の中で実習では「積極的に動くことが良い」「先生に質問することが良い」と考えるようになった可能性もあるのではないだろうか。「実習生」「養成校」「現場」この 3 者の協力体制が実習上は大切なことは周知の事実ではあるものの、実際に学生の発する言葉にもより一層耳を傾けることで、「養成校」と「現場」との連携の在り方についても常に考え続けていかなくてはならない。

6. まとめ、今後の課題

今回、分析の対象とした学生は 3 年課程の 3 年生のみであったが、1 年次からルーブリックの作成を積み重ねていくことで、指導する学生たちの実習へ取り組む姿勢などの傾向がつかめていくのでは

ないだろうか。

また、実習巡回指導の中で学生には実習途中での自己評価を実施し、実習後にも自己評価を再度行っていたが、今回は学生が自己評価を行うことを習慣化することを目的としてのルーブリックの実施だったため、点数の集計はしていなかった。今後は途中の自己評価と最終的な自己評価での点数の違いや、実際の現場の先生方からの評価との差異なども見ていく必要があると感じた。

いずれにしても、学生の作成するルーブリックは実習だけではなく、学生のそれまでの各科目の学びの状況を総合的に見ることに繋がり、さらには教員側の指導が伝わっているかどうかの指標にもなりうるものではないだろうか。ルーブリックの作成を通して、学生への自己評価の習慣化を身に付けてもらうとともに、教員の自己研鑽も兼ねて行われるべきではないだろうか。

参考文献

- 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版、35-38, 2014
- 平澤一郎：保育士養成における、ルーブリックを活用した教育評価—学生による実習・学外活動の自己評価票の作成—、日本社会福祉教育学会誌 No. 14 、2016

引用文献

- 1) 保育所保育指針、平成 29 年告示版
- 2) ダネル・スティーブンス、アントレア・レビ, 佐藤浩章監訳：大学教員のためのルーブリック評価入門、2 玉川大学出版部、2014
- 3) 石井英真：IV教育目標と教育評価の関係 7 ルーブリック、田中耕治：よくわかる教育評価 第2版、ミネルヴァ書房、48 2010
- 4) 同上 48
- 5) 前掲 2) 38-50
- 6) 前掲 2) 50
- 7) 中島英博、井上史子：第6章 学習成果を評価する、中井俊樹編著：シリーズ大学の教授法3 アクティブラーニング、玉川大学出版部、50-51、2015
- 8) 前掲 3) 49
- 9) 前掲 2) 16
- 10) 前掲 2) 16
- 11) 前掲 2) 23-36